

第5話 酒井和歌子の時代

■ 映画観を変えた『若者たち』

中央公論 1969年5月号に掲載された庄司薫の小説「赤頭巾ちゃん気をつけて」は、同年上半期の芥川賞を受賞し、大ベストセラーとなった。この独白体で書かれた小説の中で、主人公・薫くんの周囲にある二者択一テーマの第一に「酒井和歌子と内藤洋子とどっちがいいか」が挙げられている。

小説が取り扱う時点は、学園紛争により東京大学の入学試験が中止になることが決まった直後の69年初めである。その通り、前年9月に公開された『兄貴の恋人』で加山雄三を挟み競演した後のこの時期になると二人の人気は拮抗していたのである。わたしの通っていた鹿児島男子高でも、ご多分に漏れず生徒は酒井和歌子派と内藤洋子派に分かれて「対立」していた。わたしは酒井和歌子派だったと、早々に白状しておこう。

彼女の初主演作『めぐりあい』（68 恩地日出夫）は、わたしにとって特別な映画となった。公開は68年3月。中高6年一貫教育の学校で、中学から高校へ進学する間の春休みだった。実はこの休み中に、わたしにとって映画は単なる娯楽ではなく人生に影響を与える重要なものになってしまう。

休みの初めに行われる関西への修学旅行で京都市内自由行動の時間に新京極の名画座で観た『若者たち』（67 森川時久）がきっかけである。それまで、映画といえば子どもの頃のチャンバラや怪獣もの、ディズニーアニメであり、中学生になっても若大将シリーズや外国映画のヒット作を年に何回か観に行くくらいのものであった。

住んでいる鹿児島県が中高校生の映画館出入りに全国一厳しい規制をかけていたのも影響していたろう。文部省（当時）推薦作品などごく一部の認定作品を除けば、親と一緒に以外の映画館入場は禁止で、違反すると始末書、度重なると停学、退学に至る決まりだった。わたしの中学でも、1年生のときに公開された『サウンド・オブ・ミュージック』（65 ロバート・ワイズ）を観に行った生徒が大量処分されるという事件がある。『サウンド・オブ・ミュージック』ですよ（！）。そのために、わたしは休みに祖父母のいる福岡市へ行ったときに観るのを通例にしていた。

さて、何を上映しているかも確かめず旅行の自由行動の開放感で入った映画館で遭遇した『若者たち』は、15歳のわたしの映画に対する考え方を根底から覆した。田中邦衛の長男を頭に、次男・橋本功、三男・山本圭、長女・佐藤オリエ、四男・松山省二（現・政路）の五人兄妹が直面する社会問題、生活の苦労、そして彼らの間に交わされる議論の真摯さは、少し年下の自分にも十分繋がってくるものだった。

労働環境、貧困、学生運動、学歴差別、大学進学など当時の日本の若者が抱える問題を、

これに先立つ連続テレビドラマ版（鹿児島など地方では放送されなかった）に続き山内久が脚本化し、映画の製作母体である俳優座をはじめとする新劇劇団育ちの役者たちが熱演した。主演の田中邦衛が『若大将』シリーズの青大将とは全く違った生真面目な役で口角泡を飛ばすのも、商業娯楽映画との違いを際立たせた。

それまで大手映画会社の娯楽映画の面白さや外国映画の物珍しさにしか眼を向けていなかったわたしは、初めて、映画が社会を論じ、考えさせる力を持つことを実感した。中学生になってから、小説で人生や社会を考える体験はしていたが、映画にもそのような力があることを思い知ったのである。GS のザ・ブロード・サイド・フォーの歌う「君のゆく道は 果てしなく遠い……」で始まるテレビ版以来の主題歌にも共感できた。

■ 『めぐりあい』の衝撃

『若者たち』の1週間後に観たのが『めぐりあい』だった。修学旅行から帰って福岡へ行き、中洲にある福岡宝塚劇場でのことである。加山雄三主演の『さらばモスクワ愚連隊』（68 堀川弘通）との2本立てであり、どちらかといえば、前年「蒼ざめた馬を見よ」で直木賞を受賞した当時大人気の五木寛之作品の映画化で加山が主演するこちらがお目当てだったかもしれない。

しかし、映画『めぐりあい』が始まった瞬間、すっかり心奪われてしまう。「めぐりあえるその日までは 二人夢を見るでしょ……」。荒木一郎の唄うフォーク調の主題歌と共に舞台となる工場のひしめき合う町・川崎の朝靄たちこめる出勤時風景が紹介され、町にあふれる勤労者たちの姿が映し出される。そして、この初夏の駅前から物語は始まった。

職場へと急ぐ青年が、すぐ前を歩いていた娘にぶつかり、はずみで転ばせてしまう。起き上がった娘・典子（酒井和歌子）は、キツとなっていきなり青年・努（黒沢年男）の頬をひっぱたく。それをきっかけに二人は知り合いになった。

最初のデートでは、うたごえ喫茶などに行った後、煙にまみれた汚いモツ焼き屋で生ビールを飲む。気取ったスマートさとは、およそ縁がない。努は、食べている串が猫の肉だなどと言って典子に悲鳴をあげさせる。

二度目は日曜日、海辺へドライブに行く。といっても自分の車があるわけなし、修理工場に勤める友達を押し倒して修理預かり中の車をやっと借りてくる。このとき画面には、まず助手席でもおかしように笑っている典子と無然として運転する努がアップになり、一見乗用車に見えるのがカメラを引いてロングになると無粋なごついダンプカーだとわかる。こうした茶目っ気のある語り口自体、金はないが明るいこのカップルの雰囲気にとったり合っている。

二人はとにかく陽気で、笑い声が絶えない。たとえそこがごみごみした海水浴場でも、夏の海に来たとあつては水に入らずにはいられなくなり、すぐその場で水着を買って泳ぐ。この日は、努の誕生日だった。典子は桜色の貝殻を拾って、彼にプレゼントする。

泳ぎ疲れて岩陰で互いの境遇を語り合うと、二人とも家庭に問題を抱えていることがわかる。そのせいで普段は常になんともなくイライラしていたのだが、話しているうちに不思議と優しい気持ちになってくる。悩みから逃げるのではなく、それに向かいぶつかっていこうという気になる。あの恋愛が成立する瞬間の、互いをどうしようもなく必要と感じる衝動にかられてのことだ。一緒になら立ち向かえる、と。

そうやって恋愛の相手として認識すると急に水着姿が恥ずかしくなり、典子は本能的に努を避ける。帰り道、雨が降ってきたというのに助手席に乗ろうとせずダンプの荷台で頑なな姿勢を取る彼女に対し、とうとう業を煮やした努は激情をぶつけていく。荷台を思い切り仰角をつけて傾斜させ、典子を傾斜の上に取り残したまま去ろうとする。恐怖にかられ、助けて！ と叫ぶ典子。振り返って駆け戻る努。二人の気持が堰を切ったように一気に溶け合い、土砂降りの中、ずぶ濡れになりながら初めてのくちづけを交わす。

雨が上がり、帰宅した二人それぞれをたいへんな事態が待ち受けていた。

典子の方は、母親の死の報せだ。父の死後一家の主となって働き彼女と弟を育ててくれた母親（森光子）が交通事故で亡くなったという。ただ呆然とするばかりだ。

努の方は、お情けで定年を延長してもらっていた父親（桑山正一）が突然退職を余儀なくされたという。それは、父母弟妹、一家4人の暮らしが全部努の肩にかかってくることを意味した。その重さを想像して取り乱し家族と喧嘩した彼は、自分の大学進学だけを主張する弟（黒沢年男の実弟でGS寺内タケシとバニーズのボーカルだった博が演じている。後にヒロシ&キーボーとして82年「三年目の浮気」をヒットさせた）を殴り飛ばし家を飛び出す。

典子と会う約束もすれ違いとなり、すさんだ気持で深酒したあげく、勤める大手自動車会社工場で大失敗を犯し「タコ部屋」と呼ばれる重労働部署へと追いやられる、絶望した努は、工場まで会いに来た典子に「俺たち、もうダメだ」涙声で告げる。一緒に頑張ろうという彼女の言葉も耳に入らず、追いつがる典子を振り切って去る。

母の葬儀が終わり、田舎の叔父（有島一郎）の世話になる弟と別れて一人暮らしになった典子は、勤めていた商店を辞め郊外の遊園地に住み込みで働き始める。努には勤め先だけを手紙で知らせ、やり直す気になって訪ねて来るのを待つ。いつかきっと来てくれると、彼女は確信している。

すっかり秋も深まった頃、努はようやく落ち着きを取り戻し、なんとか頑張っていこうという気持ちになった。家族に対しても思いやりをかける余裕ができ、家に戻る。そして秋晴れの休日、典子のところへ出かけていく。空は抜けるように青く、遊園地の制服であるピンクのブラウスが映え、くったくのない笑顔が努を待っていた。

……と、特別の1本ということで、内容を詳しく書かせてもらった。

努は、かなり勝手気ままなところのある若者だ。典子を好きになると、なりふり構わず

追いかけて回して無理矢理デートを承知させる。日曜出勤している彼女を、青森から出てきた親類だと作り声で電話して呼び出したりもする。「今日は俺の誕生日だから付き合え！もし断ったら、殺す！」と叫んだと、後でからかわれる。

その一方で、既に婚約者のいる工場の美人事務員にもちょっかいを出す。もともと、仕事の腕さえ買われているものの、勤務が終わると同僚との賭け麻雀にうつつを抜かしている。ヤケになると家族に暴力を振るい中学生の妹まで突き飛ばして泣かす。典子と会い損ねた夜仲間と行った川崎球場では他の観客に喧嘩を売り、泥酔して場末の怪しげな店に商売女を買いに行ったりする。

典子の方も、潔癖感から母親と叔父の再婚話に反対し不機嫌になって母親を困らせる。叔父が来訪した折、露骨に避けて自室に籠もる頑なさ、度が過ぎていてわがままに見えるほどだ。努の視線の前に水着姿でいることが突然厭になりダンプカーの荷台へ逃げて彼を拒絶するのも、その表れのひとつだろう。

そんな不完全な姿の中から、努の懸命さ、典子の優しさが表れてくる。努は、女を買おうとしながらも、ポケットから出てきた桜色の貝殻を見て思いとどまる。一旦は典子に別れを告げるが、苦しい新部署で頑張り、家族を支える決心をする。典子も、努の一方的な行動を許し、彼を信じて待つ。

『めぐりあい』の二人は、決して美化されていない。彼らは特別な才能もなければ強い心も持たない。理想的な若者像とは程遠く、乱暴、甘え、わがまま、欲望といった弱点をいくらか持つ不完全な存在である。若者の姿を理想化するのでも、また逆に悪に走る面を強調するのでもなしに、現実の中でじたばた悪戦苦闘させたり心を結びつけたり、いわば等身大の青春像が表現される。それが努と典子だ。実際の青春は決してきれいごとだけではない。醜い面もあればカッコ悪い面もある。その醜さ、カッコ悪さ、不完全性を有り体にさらけ出しているのがこの作品の魅力である。

そしてここにも、『若者たち』と同じく労働環境、貧困、学歴差別、大学進学などの問題が鋭く提示されていた。俳優座という独立プロが製作した『若者たち』がそうした社会派的問題提起をするのはわかるとして、大手映画会社である東宝の青春映画でそれがなされるとは、それまで娯楽映画しか観てこなかったわたしには意外だった。

もちろん、それはわたしの個人的経験でしかない。大手映画会社であっても社会問題を追及する映画は数多く作られている。山本薩夫、今井正、内田吐夢、今村昌平、大島渚等々の監督作品を観れば、大手だからといって娯楽作品ばかりでないのはすぐわかる。青春映画でも、『キューポラのある街』（62 浦山桐郎）や『非行少女』（63 浦山桐郎）を観ればそこに社会問題への深い論及があるのは歴然だ。

しかし、わたしがそれらの作家の作品とめぐりあうのはまだ先であり、その種のものとして初めて遭遇した『めぐりあい』に衝撃を受けたのはあくまで個人の事情だった。わたし自身が中学生から高校生になっていく中で社会に対して眼を開いていく過程と、この作

品との出会いとがちょうどシンクロしていたのだろう。

■ 高3で170本鑑賞

また同時に、高校生になると大学受験がどんどん目の前に迫ってくる。学校や親からの受験圧力がわれわれ高校生をがんじがらめに縛っていた。空前のベビーブームだった団塊の世代（1947～49年度生まれ。毎年約270万人が生まれた）ほどではないにしろ、68年の高校生（50～52年度生まれ）にとっても、まだ大学は狭き門であり大学受験は頭の上に乗っかる大きな重しだった。

この年発売された高石ともやのフォークソング「受験生ブルース」は、その一節に「砂を噛むよな味気ない ボクの話を知りてくれ」とある通り、受験生の悲哀と鬱屈を歌ったものだ。高校生や受験浪人の共感を呼び、おそらくはほとんどその層の支持だけで大ヒットとなった。

そうした鬱屈感の中で『めぐりあい』を観たときの気持ちを、8年後、23歳のわたしはこう振り返っている。

68年春。15歳、高校に入りたてのぼくにとって、それはまさに「めぐりあい」だった。映画が、単なる娯楽ではなく、観ている自分の生き方にまでかかわってくる。そんな経験は初めてのことだった。銀幕の中に、ひとつの作品世界が組立てられ、そこで青春を過ごす若者と少女の姿が、カタルシスの対象に止まらず、身に迫って感じられたのだ。若者・黒沢年男、少女・酒井和歌子。恩地日出夫『めぐりあい』だ。

その頃のぼくは、かなり鬱屈していたに違いない。受験有名校での高校生活。大学というゴールを目指して一散に駆けることが強いられる。遮眼帯をかけ、馴致しようとする周囲。そんな中で自我を生かそうとすれば、衝突と摩擦が避けられない。ゴール以外を向こうとする悍馬には、鞭が加えられるものだ。閉塞状態。

『めぐりあい』の二人も、状況こそ違え、同じように閉塞されている。それぞれ、さまざまな困難を抱えて、毎日を過ごしている。めぐり逢って、つながりが生まれ、心が融れ合う。そのとき、とても柔かい気持ちになれるのだ。だが、さらに手ひどい困難が襲ってくる。生活の重みが、彼らを圧殺しようとする。それでも、二人は負けない。互いのつながりをバネにして、勇敢に立ち向かっていく。自棄になりかかっていた若者が、再び勇気を得て、離れていた少女に会いに行くとき、遊園地で働く彼女のピンクのブラウス、そして屈托のない、さわやかなほほえみ——若者を許し、力づけるのだ。

作者たちは、若さを的確に捉え、はつらつとした青春像を提示する。大仰な問題提起や手の込んだ作劇はなくても、ただ、躍動する若さを描くことで、観る側のぼくたちをも奮い立たせてくれた。八方塞がりの中でも、出口への模索をけんめいに続ければ、何か道が開けてくるような期待。ドロップ・アウトでなしに、上昇指向の中でせいっぱい頑張る

ことで何かができる期待。

(キネマ旬報 76 年 3 月下旬号)

社会に眼を開き、その中の問題を映画の中の若者たちが解決すべく苦闘するのに自分を重ね合わせるという意味では『若者たち』も同じだった。鬱屈している自分を励ましてもくれた。ただ当時、独立プロの映画というのは地方の高校生にとって日常の範囲で接することのできるものではなかった。事実、シリーズ第 2 作『若者は行く～続・若者たち～』(69 森川時久)こそ、1 回限りの鹿児島市内での上映会にもぐり込んでなんとか観たものの、第 3 作『若者の旗』(70 森川時久)は遂に観ることができないままに終わる。

そこへいくと、大手映画会社の作品は東京などの大都市より 2 週間、1 番組分程度の遅れですべて観ることができた。映画に社会を論じ、考えさせる力があるとすると、それは小説よりリアルでタイムリーに自分を刺激してくれる可能性が高いと思った。自分が生きて暮らしている現実の社会を考えるなら日本映画を観るしかない、とも。

というので、日本映画だけを観るために学校や親の眼をかいくぐっての映画館通いが始まる。高校 1 年生のときには東宝青春映画を中心に 20 本ほどだったが、2 年生になると腹が据わって校則違反も補導員の眼も恐れなくなり、松竹、東映、日活、大映の各社作品も含め 120 本を超え、いよいよ受験生になった 3 年生では 170 本ほどに達した。

放課後だけでなく、2 年になると授業を抜け出すようになり弁当を映画館で食べることも多かった。家をこっそり脱出して土曜夜のオールナイト興行にも通ったし、日曜日の模擬試験をサボって映画へ行くのは受験料を使い込めるので一石二鳥だ。当時鹿児島の繁華街天文館にあった東宝銀映、松竹第一映劇、鹿児島東映、日活銀座劇場、大映高島の 5 館がわたしの高校時代のホームグラウンドである。

■ 「お嬢さん」内藤と「庶民派」酒井

同時に、『めぐりあい』はわたしの酒井和歌子ファン歴の出発点にもなった。

『めぐりあい』以前の酒井は、決して華やかな存在ではなかった。内藤洋子より 1 年上の 49 年生まれで、子役や少女雑誌モデルを経て同じ 64 年に東宝にスカウトされた彼女の歩んだスター街道は、内藤と比べ決して順調ではない。

内藤洋子が選ばれた『赤ひげ』の役の候補に最後まで残りながらチャンスを逸し、内藤が主演作を連発していた 66 年から 67 年にかけて、酒井は青春映画や喜劇の脇役を多数務めるに甘んじていた。『伊豆の踊子』でヒロインの陰に存在する薄幸の娘の役でわずかに顔を出したのなど、当時の二人の置かれた立場を象徴するかのようだ。ようやく夏木陽介の熱血教師が主役の学園青春ドラマ『燃えろ！太陽』(67 松森健)の生徒役などで注目され 67 年度製作者協会新人賞を受けたのは、内藤に後れを取ること 2 年だった。

それが、『めぐりあい』で一躍脚光を浴びることになる。わたしは、彼女の「追っかけ」

のように出演作品を観続けた。

『ドリフターズですよ！盗って盗って盗りまくれ』（68 渡辺祐介）、谷啓の『空想天国』（68 松森健）といった喜劇のヒロイン役や、文芸作品『日本の青春』（68 小林正樹）、戦争大作『連合艦隊司令長官 山本五十六』（68 丸山誠治）で黒沢年男とコンビで助演を務めた後、前述の『兄貴の恋人』で加山、内藤と堂々三枚看板の主演を張る。

『兄貴の恋人』では古臭い規範を乗り越える妹を演じる内藤の世間知らずの無鉄砲さが光ったが、酒井もまた、『めぐりあい』の延長上にあるような貧しいが決して自分を卑下しない明るさを持ったキャラクターを確立させる。その魅力は、アイドル女優としては新しいタイプのものに思えた。

1960年に初主演して以来スターの座を保ち続ける吉永小百合は、本書で取り上げるアイドルスターたちとは比較にならない長期にわたる人気を誇った別格の存在だが、青春スター時代の彼女は育ちのいいお嬢さんらしい屈託のなさや上品さ、それに俳優業の傍ら勉学に励んで早稲田大学に入学したことに象徴される知性が売り物だった。主演作の主流を占めた石坂洋次郎原作ものは、「石坂文学」と呼ばれた青春通俗小説の特質もまた屈託のない上品さだったのである。代表作『キューポラのある街』（62 浦山桐郎）でこそ貧民街の少女を演じてはいたが、サユリストなる新語を生むほどの圧倒的な人気を得た根幹はこちらにある。

内藤洋子もまた、吉永の路線を継承していた。前章で述べたようにほとんどが実生活と同じお嬢さんの役であり、常に上品さを感じさせたし、屈託のなさは物怖じしない無鉄砲さとまで感じられた。二人の輝きの背後には、高度経済成長期と呼ばれる60年代日本のそこそこにあふれていたどこまでも豊かになれるという意識、言葉を換えれば吉永が「いつでも夢を」と歌った〈夢〉、内藤主演の映画の題名そのままの〈あこがれ〉があった。

それに対し酒井の演じるヒロインたちは夢やあこがれより現実を見つめ、現状の中で頑張っていこうとする。彼女の微笑みはいかにも庶民的で、陰のない人なつっこい笑顔が『めぐりあい』の努のようなスクリーンの中の相手役だけでなく映画を観ているわたしたちの心まで和ませ、頑張るためのエネルギーを与えてくれるかのようなようだった。お嬢さん風の取り澄ました微笑からは得られっこのない暖かい雰囲気醸し出されるのだ。その暖かさゆえに、どこにでもいるような女の子という感じでいながらも観客を魅了した。

■ 黒沢年男に自分の姿を投影

その魅力を決定づけるのが、再び黒沢年男とコンビを組んだ『街に泉があった』（68 浅野正雄）である。橋幸夫、舟木一夫、西郷輝彦の歌謡御三家に次ぐ四番目の地位で人気を集めた歌手・三田明のヒット曲の映画化だ。2番の「屋根を流れる雲の行方に 背伸びしているきれいな素足」という歌詞が酒井のイメージにぴったりだった。三田はヒットしたデビュー曲の映画化『美しい十代』（63 吉村廉）以来日活や松竹で8本の映画に出演して

おり、主演作もある。この映画で東宝初出演を果たした。

酒井の役は町の大衆食堂の女店員。一間暮らしのアパートで故郷から送ってきたカキモチを囓りながら小さなテレビに見入っているところなど、いかにもどこにでもいる娘さんという感じだ。吉永小百合や内藤洋子にはないぎっくばらんな庶民性が滲み出る。

ここでも黒沢年男は家族を支えるべき立場だ。団地に所帯を持つ長男（佐藤允）を頼って田舎から東京に出てきた母（乙羽信子）、次男（黒沢）、三男（三田明）、小学生の末弟の四人は狭い団地に同居するわけにもいかず、下町の倉庫の一隅に住んで各自仕事をみつけ生活の基礎を築こうとする。

そのうち次男と三男は共に女店員（酒井）を好きになり兄弟で張り合うが、結局人のいい三男が彼女と次男を結びつけることになる。次男は行動的で一家を率いる気概を持ってはいるものの、金持ちの令嬢（前田美波里）と偶然知り合うと、そちらに色気を出す軽々しいところがある。女店員をないがしろにして遊び回っておきながら、振られるとすぐご戻ってくる。そんな身勝手な彼を、彼女は結局許すのだ。

『めぐりあい』と同じである。酒井は、強引な黒沢に最初反発する。しかし、気はいいのだが貧しい境遇に負けすぐにヤケになってしまう彼の良い面を次第に理解するにつれ、助けて共にやっていこうと決心する。相手のダメな面を否定せず受容し、成長を待つ。そして屈託のない笑顔で励ます。これが二人の共演作のパターンになっていった。

学徒出陣によって踏みにじられた戦時中の青春を回顧する中年男（藤田まこと）の息子を黒沢が、そのガールフレンドを酒井が演じた『日本の青春』でも、父の世代の気持を心底では理解できるのだが戦時体験の押しつけがましさに反発して家を出て自力で生活しようとする受験浪人の彼を、励まし力づける。

『燃えろ！青春』（68 松森健 脚本・松木ひろし）は、60年代後半に人気を呼んだ学園ものテレビドラマの流れをくむ作品である。元々は、石原慎太郎原作、裕次郎主演で作られた日活『青春とはなんだ』（65 舛田利雄）が源流で、それが同年、東宝の夏木陽介が主演して日本テレビでドラマ化され大ヒットする。田舎の高校に赴任した熱血教師がスポーツを通して生徒たちを導くという話の構造は、主演を竜雷太に替えた翌66年の後継作「これが青春だ」にも連なっていく。

東宝では、夏木を主演に映画化して『これが青春だ！』（66 松森健）、『でっかい太陽』（67 松森健）、『燃えろ！太陽』（67 松森健）と連作する。このシリーズをリニューアルしたのが『燃えろ！青春』だった。脚本が22年生まれの須崎勝弥から松森監督と同じ28年生まれの松木ひろしに若返った。夏木は脇役に回り、それまで高校生役だった黒沢年男と酒井和歌子が監督とコーチのコンビで女子バレー部を指導する。ここでも、初めは黒沢の強引な自己流指導に反発する酒井が、しだいに彼を理解して支えてやる。

先述したような閉塞感の中で高校生活を送っていたわたしは、同時に自意識を肥大化させていく過程で、自分が何ほどのものなのか、社会で通用する人間になれるのだろうか

の不安に苛まれてもいた。己の未熟さを感じるにつけ、黒沢年男演じる青年のダメなところが身に重ね合わせて感じられた。だから、それを許容し、見守り、微笑みで励ましてくれる酒井和歌子の笑顔が胸に沁みたのである。田舎の鬱屈した高校生であるわたしが、その笑顔にどれだけ救われたことか。

■ 「若大将」シリーズのヒロインに

そして彼女の笑顔は、東宝青春映画の大看板、若大将シリーズでも見るようになるようになった。69年のお正月映画『フレッシュマン若大将』（69 福田純）で、それまでの澄子さん（星由里子）に代わり大学を卒業してサラリーマンになった若大将の恋人役に起用される。新しいヒロインは節子さんだ。

話が進み、若大将と他の女性との仲を誤解して怒った節子さんが背を向けて駆け出すシーン、映画館でわたしは、ああ、またかと身構えた。前のヒロイン澄子さんの誤解→しょげ若大将→誤解とける→スポーツの試合で若大将奮起→勝利、という何度となく繰り返された筋立てを頭に浮かべたからだ。

ところが、次の瞬間、節子さんは立ち止まってこちらを向き、じっと若大将の表情を見る。周囲の情報に惑わされるのではなく、彼自身の心を見つめることで判断しようとするのだ。澄子さんとは違い、ひょっとすると誤解ではないかと思い返してみるだけの分別がある。そうやって自分の眼で確かめた結果、若大将の説明を信じるとにっこり微笑み、再び駆け寄ってくる。

毎度、弁解も聞かずに一方的に怒っていた澄子さんとはたいへんな差だ。ここには心理の綾があるし、それまでの若大将シリーズの単純明快な物語では入る余地のなかった細かい気持がこめられている。信じてもらえるのだから、若大将はもう、誤解されてしょげ返る必要がなくなった。節子さんは彼の愛情を信頼し、やさしさのこもった笑顔を見せてくれる。

何より、酒井和歌子の笑顔の効力は絶大だった。それに支えられて仕事に成功する若大将は、もはやスーパーマンではなく一人の普通の若者として、恋人の微笑みによって湧いてくる力で仕事上の難局を打開していく。大学のスポーツ試合とは違い、ビジネスの世界には多くの要素がからんで紆余曲折がある。

大学生編から社会人編になることでシリーズは変貌を遂げた。以下、『ニュージーランドの若大将』（69 福田純）『ブラボー！ 若大将』（70 岩内克己）と、若大将をスーパーマンでなく普通の若きビジネスマンとして扱う流れが続くこととなる。また実際、二枚目で万能スポーツマンという出来過ぎた主人公像では、もはや若い観客の共感を得ることはできなかった。話の舞台も派手な海外ロケを伴う国外ではなく国内が中心となる。

時代は60年代から70年代へと移りゆき、観客が青春映画の主人公に求めるのは自分と遙かに懸け離れたカッコいい姿ではなくなってきていた。圧倒的カッコよさを誇った石原

裕次郎の人気に陰りが見えるようになったのもこの時期である。むしろ、自分と共通点のある等身大の姿に感情移入し、その挫折にもカッコ悪さにも共感した上でヒロインの笑顔に励まされたい、そんな気分が出始めていた。

高度経済成長に酔い国全体が勢いづいていた 60 年代が終わりに近づくと、その負の面も意識されてくる。環境破壊、コミュニティ崩壊が問題視され、地方の過疎化、高齢化が顕著になりつつあった。68年に水俣病が工場廃棄物が原因と断定されたのをはじめ、阿賀野川有機水銀中毒、四日市喘息、神通川のイタイタイ病などの深刻な公害病が明らかになった。70年には光化学スモッグが社会問題となる。

社会人となった若大将は仕事や家族間の問題に悩むことが多々ある。『ブラボー！』では前から付き合っていて結婚しようと思っていた女性に振られるし、会社をクビになってフリーターになったりもするほどだ。気楽に音楽やスポーツに打ち込んでいた大学時代とは大違い。

それに対して酒井の節子さんは、『めぐりあい』や『街に泉があった』で黒沢年男を励ましたのと同じく、やさしく手を差し伸べた。そのとき、マンネリ化していた若大将シリーズは青春映画の息吹を取り戻し、みずみずしく再生されるのである。

■ キネマ旬報に映画評が載る

その代表作が『俺の空だぜ！若大将』（70 小谷承靖）である。シリーズが始まった 61年には小学3年生の子どもだったわたしは、大学受験を半年後に控えた高校3年生になっていた。といっても受験勉強には身が入らず、相変わらずの映画館通いの毎日だ。その1年前、高校2年の秋に投稿した映画評がいきなりキネマ旬報に掲載され、少しだけ自信を持てるようになってきてはいたが、こんなことをして大学に入れるのか、社会で生活していけるのか、との不安を常に抱えていた。

もちろん親には映画のことは内緒である。投稿する際も住所を記すことができず、近所の小さな特定郵便局で局留郵便扱いにしてもらっていた。学校の成績が悪いのは隠せないから、両親は受験の心配を毎日口にする。勉強、勉強、勉強……。まるで「受験生ブルース」そのままだった。「一流の大学入らねば 私じゃ近所の皆様に あわせる顔がないのよ」と迫られているも同然。

親の期待に応える自信は全くなく、かといって当時流行った「猛勉強」すなわち猛勉強をする気にもなれない。「シケ単」「でる単」と呼ばれた受験生必携の英単語集「試験にでる英単語」（67年発売）を買うには買ったが暗記する努力は1ページも続かない。「四当五落」（4時間しか眠らず勉強する者は合格するが、5時間も眠る者は不合格）という受験生常識も、わたしの場合、睡眠は4時間でもそれは本や映画雑誌を読んだり文章を書いたりするためだった。

どの程度のレベルの映画評を書いていたのかを知ってもらうためにも、「読者の映画評」

欄に掲載されたわたしの『俺の空だぜ！』評全文をお読みいただく（キネマ旬報 70 年十月下旬号）。

五社のシリーズものの作品のマンネリ化というのは、やはり動かしがたい事実だろう。この若大将シリーズはその最たるもので、どの作品も同じようなストーリーのくり返しだ。だが、マンネリ化したシリーズもののワクの中で監督が腕をふるい、何かをクリエイトする余地はないのだろうか。若大将シリーズ第十六作「俺の空だぜ！若大将」には、そのような作家の試みのひとつの例が見られ、それはまた、かなり成功していると思われる。

いつもの通りのありきたりなストーリー。しかし、エンド・マークが出たときぼくが感じるのは、若さのみずみずしい手応えだ。陳腐な話のワクの中に、新人小谷承靖監督は、若さのフィーリングというものを画面いっぱいみながらせている。おそらく、最近のこのシリーズで、若大将や青大将がこんなにまで若々しく見えたことはなかった。伊豆の草原で若大将たちが遊ぶシーンなど、あの出目昌伸監督の記憶すべき傑作「俺たちの荒野」を思わせる若さの噴出があるし、いっぽう、若さの持つ矛盾やみじめさも、やや不十分ながら、加山雄三と大矢茂のやりとりであるとか、処々に描きこまれている。

有島一郎や伴淳三郎のベテラン俳優がかむ前半が、古くさく精彩のないのにくらべて、後半は、ギャグひとつとってみても新鮮で、楽しく見ることができる。そこには、若い作者と演技者が、一体となって映画を作っているという感じが感じられる。

前半、若大将が、「うち」である地域社会と、「よそ」である会社の板ばさみになるところをあまりに安直に解決してしまう点だとか不満も残るが、その不満は、ぼくたちの世代の女優としての酒井和歌子のほほえみの前に溶け去る。そうして、ほほえみひとつですべてが解決されるという「ほほえみ合いの連帯」が、作者と出演者たちと、ぼくたち若い観客が共有しうる若さのフィーリングなのだと思う。（鹿児島市下荒田郵便局留・高校生・18歳）

今読むと自分でもお恥ずかしい限りだが、これがこの映画と真摯に向き合った田舎の受験生の偽らざる感想だったのは事実である。子どもの頃見た大学生若大将は、幼い眼から見ても実に楽しそうな奔放に生きるスーパーマンだった。でも社会人若大将は、自己の信念と企業の方針の板挟みになって悩み会社を飛び出す羽目になったり、父親と意見対立して勘当されたり、さまざまな壁に阻まれる。そこに共感できるものがあつた。

■ 「若大将」は永遠に

また、時代も明らかに変化しようとしていた。

60年代は64年の東京オリンピック、70年の大阪万博などの大イベントや経済成長の中で開発と建設は花形産業だった。巨大建設プロジェクトを誇らしげにドラマ化した映画も少なくない。日活『黒部の太陽』（68 熊井啓）は63年完成の巨大ダム黒部川第四（通称ク

ロヨン) 建設を、東映『超高層のあけぼの』(69 関川秀雄) は 68 年に初の超高層ビルとなった霞ヶ関ビル建設を描いた。

しかし 70 年代へと入ると、公害問題などもあり環境権という考え方も定着して開発や建設への反対運動が湧き起こってくる。66 年に千葉県成田市三里塚に建設が決定した新国際空港は、地元住民の頑強な抵抗に遭い、折から盛んになっていた学生運動とも結びついて空前の反対闘争が繰り広げられた。他にも全国各地で、いろいろな形の建設反対運動が起きてくる。

『俺の空だぜ!』でも、若大将の生まれ育った地元で彼の勤める建設会社がマンションを計画する。用地買収をめぐる住民とのトラブルは、明らかに成田の問題が投影されていた。若大将の父・久太郎ら地域住民は買収に反対する。先に引用した文中で触れた「うち」と「よそ」の板挟みとは、これを指している。

悩む若大将、挫折する若大将を支えるのは、もちろん酒井和歌子の節子さんである。ただここでは、それが若大将と節子さん間のことだけではなしに、田中邦衛の青大将、次期若大将候補として設定された大矢茂、そしてこの映画を観ている自分たち若い観客にまで共有される感情になっていると感じたのだ。当時学生運動などでよく使われた「連帯」という言葉を使って「ほほえみ合いの連帯」などと表現したのは、自分も画面の中にいるような共感を勝手に覚え、舞い上がってしまったからに他ならない。

伊豆の草原のピクニックで、33 歳の加山、38 歳の田中が 21 歳の酒井と同じほどに若々しく駆け巡り、戯れる。緑の草が風に揺れる中を遊ぶ彼らは底抜けに明るく、稚気に満ちている。その場面を演出するのは 35 歳の新人監督・小谷承靖。その新鮮な感覚に引き込まれて客席にいる 18 歳のわたしが共感する。「作者と出演者と、ぼくたち若い観客が共有しうる」とは、映画を観ることの幸福感に酔った気分を稚拙に言語化したものだった。

後継候補の大矢茂が二代目若大将を名乗って主演し、東宝が酒井の後を受けて売り出そうとしていた吉沢京子とコンビを組んだ『若大将対青大将』(71 岩内克己) では、加山、田中、酒井は後景へと引く。実質的には加山雄三の若大将シリーズは 16 作目(『歌う』をカウントしなければ 15 作目)の『俺の空だぜ!』で完結している。大矢若大将は、残念ながらこの一作だけで終わってしまった。

それでも、75 年には草刈正雄を若大将にした『がんばれ! 若大将』(75 小谷承靖) が企画され、『激突! 若大将』(76 小谷承靖) と二作を数えた。そして 81 年には加山雄三の芸能生活二十周年を記念して『帰ってきた若大将』(81 小谷承靖) が、加山、田中、有島一郎、中真千子、江原達怡という初期メンバーがそのまま出演(72 年に亡くなった飯田蝶子は遺影で)して華やかに再登場した。

現在 74 歳の加山雄三が月曜から金曜まで連日出演する紀行情報番組のタイトルにも「若大将のゆうゆう散歩」と「若大将」が冠せられているように、若大将シリーズは実に息長くファンの記憶にとどまる昭和の青春映画シリーズなのである。